

国立国会図書館法と中野重治

佐藤 晋 一*

< は じ め に >

中野重治（1902-1979）は「司書の死」（初出、『新日本文学』1954年8月号、執筆は7月3日、であるという。尚、この作品はこれ以後、①『夜と日の暮れ』1955、②『新選現代日本文学全集(7)・中野重治集』1960、③『旧版・中野重治全集(3)』1961、④『新版・中野重治全集(3)』1977、以上筑摩書房、⑤『近川近代文学全集(8)・中野重治』能登印刷・出版部、1989、に収められているだけのようである）の中で、国立国会図書館法（以下、国図法）の成立について、従って国立国会図書館（以下、国会図）の意義・内容について批判的な見解を述べている。国図法が成立し、直ちに公布（1948年2月9日）された当時、中野が日本共産党所属の参議院議員（全国区・3年議員）であったことを考えると、その見解の公表がたとえ小説という形態をとり、国図法公布後6年余を経てのものであったとしても、否、それ故にこそと言うべきかも知れないが、看過できないものを含んでいると思われる。また、「司書の死」の発表の翌9月号から、再び『新日本文学』の編集長に就いてもいるのである。¹⁾ これらのことを考えあわせると、中野の見解をとりあげて検討する必要は十分にあると思われる。

I. 「司書の死」における国図法・国会図。

ともかく、〈司書の死〉までをたどろう。中野の高等学校の同級生・高木武夫は、中野と一緒に東京の大学にきてドイツ文学科で学び、卒業した。その後会った時には「図書館員の養成所のようなところの仕事をしているといっていた（p.302）。」中野は1924年4月に東京帝国大学ドイツ文学科に入学し、1927年3月卒業する²⁾「それから長い時がたった。朝鮮の問題。満州の問題。国内での共産主義・民族主義の弾圧。朝鮮人・台湾人にたいする民族語の禁止、日本語・日本文の強制。ドイツ・イタリアのファシズムとの日本の結合。中国侵略と虐殺と暴行。第二次大戦。空襲。かゆと薄い汁との食事。たばこの吸いがら集め。そしてやがて日本の敗戦。アメリカ軍による日本占領……」（p.302）。」

「日本占領アメリカ軍管轄のもとで、どんでん返しを打つような変化が日本に加えられて行った。治安維持法の廃棄というようなことがあった。国軍の解体ということがあった。政治活動の自由、組合組織の自由、言論の自由、検閲の廃止というようなことがあった。教育制度の基本変化というようなことがあった。それは人の目についた。中身の性格吟味にまでは目が行かなかったとしても。またそれは、それができにくいようにいろいろと工夫されてもいた。

いっそう性格吟味のしにくいことが、人目につく変化のうしろで、人目から隠して運ばれていた。帝国図書館からきた国立図書館の廃止、国立国会図書館の創立、国会図書館への主要な私立図書館の吸収、国会図書館への国立図書館の支部としての吸収といったことが隠密のうちに運ばれた（p.304）。」「変化にとまなう法律・法令の改廃などは正確には知らなかった。要するに、こうやって、徳川の紅葉山文庫を

* 茨城大学教育学部

明治天皇の内閣が没収してきたコースの延長の上で、日本の国立図書館がアメリカ政府の調査網、宣伝網のなかへ、親近関係で組み込まれることとなった。言いすぎを避ければ、私立の大学図書館を含んで、日本の国立国会図書館網が——それは、「網」としてまだ出来ていなかったが——日本をアメリカのための反アジア軍事基地にしようとするアメリカ政府の方へ、それ自身の方向で一步踏み出したのだった。

矛盾と摩擦となしにはそれは進まなかった。アメリカからきた、アメリカ議会図書館のクラブと図書館協会のブラウンとは、日本の図書館を私服でこっそり内偵した。いろんなことがあった。日本の図書館関係者がアメリカへ喚ばれることになった。さすがに図書館関係には、アメション種属は全く見られなかった。人選がなされた。ここで、図書館人の、基本では人類を信用した、物欲のうすい、善良な、しかし性格的には消極的なところが見つめられた。高木武夫がその一人としてアメリカへ行くことになった。……半年ほどで高木の仕事はすんだ。1950年5月末になっていた。高木はしきりに日本帰国を急いだ。何でそんなに急いだのか、死んでしまって今となってはわからない（pp. 304-5）。]

高木は帰国を急いだ。そのころ飛行機や船の切符の入手の手続きが「急に面倒になったからでもあった。」つまり、「軍人以外のもの、政府関係以外のもの、外国人にたいして（切符が）ひどく制限されはじめた」ばかりか「飛行機そのもの、汽船そのものさえ」欠航するようになった。「軍用機と軍艦とだけが太平洋をわたった。それは、水上と空中とで、太平洋に黒ずんだ橋をかけるようだった。銀いろの飛行機さえ列となって黒ずんで見えた」ほどだった。

「高木は、続けて船をつかまえそこねた。彼は、日本の国家公務員として、アメリカと日本との政府間の関係でアメリカへ行ったものとして、優先的に船室が取れるはずだった。それが取れなかった。」しかしやっとのことで「貨物船便の一つが……高木の手につかまった。」「高木は勇んでそれに乗りこんだ。」ところがこの貨物船は「軍用貨物船だということが明らかになった。人と貨物とは軍のもとにあった。アメリカ軍将校がいっさいを指揮した。これは走る兵営だった。高木たちはその中へまぎれこんだ『地方人』だった。しかも、これは、人以下の、アメリカの占領している日本の『地方人』だった（pp. 305-6）。」高木はハワイをすぎて横浜に近づきつつあった船上で「急に発病した」「彼自身は虫垂炎を疑った」のであるが、船医は「軍医だったが、肺炎を宣告した。」「高木はひととおりの肺炎の手当を受けた。それは効き目を見せなかった。目に見えて衰弱がきた。」そこで高木は「いちばん性にあわぬこと」であったが、日本の国家公務員として日本政府とアメリカ政府との申合わせによってアメリカに来て、帰国するのだから、まだ「見られる状態である」から、「再度の診療を受けたいから診察してくれ」ということを「他人に申し入れるといういやな努力をあえてした。」その高木の「顔をしばらく見て」のようであったが「言い分は、受けつけられた。」そこで「はじめて虫垂炎が宣告された。せま苦しい場所で手術がとりかかられた。」手術をしたのは「外科の軍医」であった。高木は「根拠なしに『これ、獣医じゃないかな。』と思った。」

手術はすんだのだが「経過は思わしくなかった。」高木は「『横浜へ迎えにこいと、時刻を入れて家族に知らせてくれ。無電を打ってくれ。』と頼んだ。『それはできない。許されぬ。いつ横浜港へ着くかは、いまどこを走っているかとともに軍の機密なのだ。』衰弱して横たわった高木をのせて走りつづけた。続けて雨が降っていた。とうとう船が横浜に着いた。……軍と政府と以外には全く秘密にして、関係者以外犬一びき通さぬ波止場で軍事荷役がはじまった（p. 306）。」

波止場の「端に、軍用移動組立ベッドが一つ置いてあり、」「小さい人間が一人、それに埋まるようになって、しかしべしゃんこになって、寝具だけと見えるありさまでそのなかにいた。小降りの雨がそこに注いでいた。衰えきった高木武夫は、ときどき目をあいて空を見た（pp. 306-7）。」顔をかたむけ

て雨をさけようとしたのだができなかった。「波止波関係の日本人役人と、同じ貨物で来た一人の、アメリカにとっての外国人とが見かねて将校船長にかけあった。そこへ軍医も出てきた。……荷役は最後へと進みつつあった。」「家族へようやく通知が出ることとなった。」そして「その場からまっすぐ、できるかぎりの注意のなかで、日本の病院へそろつと移された。できるかぎりのことがなされた。」しかし高木は死んでしまった。「すっかり風邪を引きこんでいなかったら助かったかも知れなかったが」と、後で「日本人医者が」言った。高木夫人が6月25日に「外国関係の役所へ呼ばれた。」「高木武夫氏には全くお気の毒であった。したが、死の前後に関しては、決して口外なさぬよう^(ママ)」と「死を悼まれ、同時に『勸告』を受けさせられた(p. 307)。」この6月25日の「午前四時ごろ、南北鮮境界線である三十八度線にそった^{しゅんせん おうしん かいじょう}春川、甕津、開城付近と東部海岸地区などで、北鮮軍と韓国軍とのあいだに戦闘が開始された。」韓国政府は「同日北鮮とのあいだに全面的内戦が発生したと公表したが、同日朝の北鮮側平壤放送は韓国側にたいして正式に宣戦した」と新聞は伝えた。高木夫人は新聞は読んだが平壤放送を聞いていなかった。もし「聞いていたら、そんなことが一言半句も放送されなかったことを知っただろう。ただ彼女の頭のなかで、役所でのひどい口どめ、あれやこれやからの無電が許されなかったことの想像とこれとが結びついた。それならば、普通貨物船を軍用船に仕立てて、大急ぎで機密に日本へ送りつけた事情が、その事情でわきかえっているアメリカのなかで、武夫にそれだけびんびんひびいたのだったろう。それで、武夫が、消極的なあののんきものに似ず、貨物船にまで取りついたのであったかと思われて、彼女は足足りした(pp. 307-8)。」

「おれも本食い虫になるのが好きだ。」が、「高木もそうだったろう。しかし、それは『質朴』、『強さ』、『たたかうこと』、『ひたむき』に結びついていなければならぬのだ。司書も図書館員も。日本では、これからはいっしょに大ごとというわけだろう。これを書いて、司書高木武夫のためにおれは祈ろう(p. 308)。」(以上は、『新版全集(3)』に拠る。)

Ⅱ. 中野重治の国図法・国会図の扱い方について。

中野は「司書の死」について、1961年6月24日付の、『旧版全集(3)』の〈作者あとがき〉で、次のように述べている。「外国は、『司書の死』にもいわば言葉として出てくるが、作者はどの外国をも知らなかったから外国を描くということができなかった。つまりいえば、いろいろの勢力、グループ、人々の世界往来が全くさかんになってきた戦後の十年間、作者の身体はもっぱら国内にしばられていた。他動的にはない。しかし世界は縮んできているのだから、こういう事実は実作者にとって一つのマイナスでなくはないと思う。」中野は他動的にはないのだがくもっぱら国内にしばられていた戦後の十年間の中で「司書の死」を書いた。しかもその十年間という区切りの最後にちかい年の8月号の雑誌に発表したのである。『旧版全集』の第3巻は「1946年から1956年までのあいだ……10年である……その10年のうちに書いたものほとんど全部(32篇)を集めたもの」である(〈作者あとがき〉)。1977年4月7日の日付けをもつ『新版全集(3)』の〈作者うしろ書〉では「全体として言って、これらの短篇は、日本共産党関係で戦後のその再出発、50年分裂(コミンフォルム批判による—引用者)、55年6全協にわたって書かれたものなのである」と書いている。そのうえ「さらにそこに、私に直接かかわって国会の件が出てくる。戦争のすんだ45年11月、私は共産党に再入党した。その前に話があり、34年『転向』のことがあって一応辞退したのであったが、その後また話が出て私は感謝して再入党したのであった。するとそこへ、46年3月になって福井県から衆議院選挙に出ろという話があり、私はことわったが、さらに話があったうえ、今度は郷里の農民たちから直接手紙が来て私はそれを受けることにした。」しかし、結

局衆議院選挙および同補欠選挙では落選し、1947年の参議院選挙に立候補して当選し参議院議員となった。「そこで働くことになって私の毎日は驚きとろたえとの連続だった。この形での政治世界、この形での政治活動に、自分がなんとなく向かぬらしいこと、それを、そんなことを言っていられぬ場合が人間にはあると感じつつ私は応じなければならなかった」のであるが、「そこではんのちょっと働いたことを無駄だったとは思っていない」とも書いているのである。

中野は国会議員としての演説をまとめて単行本としたし、旧・新版全集にも各々1巻をあてている。また中野には、日本共産党国会議員秘書団がついていて「この秘書団のことを、未完の小説『アンケート断片』の冒頭でちょっと書きかけたことがあるが、いつかはかれらのことを完全にかきたいと思っている」と1962年11月1日に、『旧版全集16』の〈作者あとがき〉で書いていた。結局、「国会についての長篇小説を書くというもくろみはとうとう実現しなかった」³⁾のであるが、「こういう人々が現にいるということは私には驚きでさえあった。それは尊敬されるべき人びとのグループだった。私はかれらに、特に直接私をたすけてくれた何人かの人びとに深く感謝する。時には、かれらは、ある種の危険をもおかして私をたすけてくれたのだった。これは、私にとって生涯にはじめて出会った人びとだった」と回想している（同上、〈作者あとがき〉）。1978年になってからも「あのころの秘書団のことを考えると——それを小説の形にしかけたこともあったが、私は今も何と言っていにか言葉が見つからぬ。彼らは文字どおり身を粉にして働いていた。全くそのおかげで私などは働けたのに過ぎない」と書いている（『新版全集23』〈著者うしろ書〉）。

短篇小説「司書の死」はかなり重要な作品ではなかろうか。中野自身に即してみても、国図法制定・国会図の創立という側から考えても、である。特に後者の側面について、当時、参議院議員であり、かつ日本共産党文化部副部長（1948年5月5日就任）だった中野重治が、それをどのようにみていたかが端的にうかがえるという点でも貴重なものであるといえよう。

さて、周知の如く中野重治と図書館の関係には深いものがある。図書館についてはしばしば発言し、書いてもいる。例えば福井県立図書館についての言及もあるが、中野は魚津の図書館が横山源之助と深いかわりがある⁴⁾ことを知らなかったとは思えないのである。図書館というものの役割・機能に関しては十分深い知識と理解を持っていたはずの中野が、国図法及び国会図については、既に紹介したような見方・見解をもっていたのである。

まず、〈日本占領アメリカ軍管轄下において〉人目につく改革がなされたが、〈人目から隠して〉運ばれたこともあり、国図法・国会図の問題はそこに入るというのである。人目につく改革も、実は〈中身の性格吟味〉ができにくいように〈いろいろと工夫されていた〉ということは、中野によればそのことが逆に「『占領』が、日本についていえば（ドイツにくらべて、という意味であろう——引用者）、特にそのはじめの時期に『解放』と微妙に結びついて」（『旧版全集3』〈作者あとがき〉）しまうというようなことの原因にもなったというのであろう。しかし、国図法・国会図の問題は〈人目につく変化のうしろで、人目から隠して運ばれた〉と言えるだろうか。中野が参議院議員であったちょうどその時、参議院図書館運営委員長は羽仁五郎（1901-1983）であった。羽仁は東京帝国大学を中野と同じ1927年に卒業しており、1947年の参議院選挙でトップで当選したのである。また、国会内では法務委員でもあった。そして、国図法は、従って国会図の基本的構想は参議院図書館運営委員会（以下、参院図運）を中心に練られて実現するに至ったのである。参議院本会議は満場一致で国図法案に賛成し、列席していたクラブとブラウンの両使節に対して心からの拍手を送ったという⁵⁾。

〈人目に隠して〉——というが、では何を隠したのだろうか。〈性格吟味のしにくいこと〉だと中野

は書いているが、この場合についてもそうだったのだろうか。そうだとすれば、大きな問題である。しかし、この点についても、羽仁委員長が書いていることや、当時参議院事務局にいた酒井 悌氏（のち国会図副館長となる）などの証言によれば、そうとは言い切れないように思われる。⁶⁾新聞が盛んに社説をはじめとして国会図問題をとりあげているし、雑誌も相当数とりあげているし、図書館関係者の発言も多くあった。⁷⁾中野自身が各委員会において活発に活動していたのであり、⁸⁾確かに参院図運のメンバーではなかったのであるが、何事をも知りえなかったというのだろうか。参院図運が日本共産党に対して、だから中野議員に対して意図的にせよそうでないにしろ、隠したということはありえないだろう。参院図運には金子洋文もいたのである（金子は後に羽仁五郎のあとをうけて2人目の参院図運の委員長となるのである。）日本共産党の議員は衆議院にもいたのである。それでもく人目にく隠せるのだろうか。

中野の挙げていることのうちく帝国図書館から国会図への変化は、少くとも隠密に運ばれたものではないと言えよう。もしそういうことがあったとすれば、それは日本占領アメリカ軍と日本国民との関係でく隠密にくなのではないのではなかろうか。さらに、く国会図の創立、それへのく主要な私立図書館の吸収の2点を中野は挙げているが、果してそうだろうか。国立図書館が国会図へと姿を変えるに至ったことについては、国会法との関係の方が重要であり、とり挙げるとすればその点でなければならぬだろう。つまり、国会図の創立を単独でとり挙げるのではなくて、く国会法と国会図の関係を見るべきではなかったのか。この点については、J. ウィリアムズ『マッカーサーの政治改革』（市雄貴・星 健一訳、朝日新聞社、1989）での証言が貴重なものである。むろん、本書の原著は1979年、訳書も1989年の刊行であるから中野は生前に見ることができなかったのだが、しかし国会課長J. ウィリアムズがいたこと、そして国会改革が彼のリーダー・シップのもとに展開されつつあったことは目にしていたのである。このウィリアムズと参院図運委員長羽仁五郎との間では国図法・国会図及び館長人事の件でのコンタクトがあるのである。くりかえせば、国会法の改正との関連で国会図に関する構想が生じたのである。このことが中野にはく隠密に運ばれていると映ったのだろうか。しかし国会法の問題は、く司書の死と関連づけられてはいないのである。人目につく面でもそのうしろでも、国会改革についての即ち人民主権構想についての動向がどうであったのかについての中野の言及がないのである。主権が天皇ではなく国民にあるということの宣言及びその具体化としての憲法制定、そして三権分立の構想についても同様である。中野がく国会図への国立図書館の支部としての吸収を挙げていることから、国会法との関連を十分にふまえているとは言えないように思われる。何故なら、この支部図書館制度は世界的に類例をみないものであり、立法府の行政府に対する、立法行為の行政行為に対する優位性の確立が目的だったのである。⁹⁾現実的にはこの基本構想は1990年の現在に至っても十分な形態・機能をもつに至っていないのであるが、この事実、また中野が目の前にしていた現実の中での事実から、逆に構想そのものが不十分なもの、人目をさけて隠密に運ばれようとしたための結果であるとは遡及しえないはずである。オリジナルなものを、それが十分な展開をみせないという事実と拠って否定することはできないはずである。国会法は、従って主権在民の論理は国会図の前提であり、それと切り離されて論じうるものではないのである。だから国図法はく真理がわれらを自由にするというモットーをかかげたのである。中野がそれを知らなかったとは思えない。中野及び中野が拠るところの基本的立場からしてありえないし、あってはならなかったのではないか。主人公・高木はく図書館員の養成をしたのであるが、このことを知らない、単なるく本食い虫だったのだろうか。く親友・高木)のなすべきことは何であったのだろうか——中野はこのことをどう考えていたのだろうか。

だからく私立図書館の国会図への吸収にかかわる問題があるとしたら、それは私立図書館の方から

みての問題かどうかが問われるべきではなかったか。このことをぬきにして、単に国家機関への吸収という面のみをとりあげているはずはないのだろうが、疑問が残る。

中野は以上のことをすべて含めてく要するにこうやって紅葉山文庫を明治天皇の内閣が吸収してきたコースの延長上で、国立図書館がアメリカ政府の調査網・宣伝網の中へ親近関係で組み込まれたとみるだけでなく、く日本を反アジア軍地基地にせんとするアメリカの政策の方へく日本の国立図書館網が、それ自身の方向で一步踏みだしたとみているのである。この一文は、く言いすぎを避けくての文だけに、相当に問題のあるものではないか。中野自身の歩み方に即してみても、である。く徳川から明治天皇の内閣へというコースと、1945年8月15日の前から後へのコースは、一直線のコースなのだろうか。1945年8月15日以後の最大の問題は、明治天皇の政府が最大の問題としたことの延長上にあるのだろうか。そうであるかどうかは、中野自身が最も良く知っているはずのことであろう。両者の問題の間に質的な相違はないのだろうか。両者の質的相違が国会図書館構想に反映しているのではなかったか。中野は「司書の死」を収めた『旧版全集(3)』のく作者あとがきで、く戦争一敗戦一被占領というどんでん返しの瞬間に人民による国の占領がなかったこと、それができなかったことに最大の問題があったと言っていたはずである。羽仁委員長は、人民主権の確立のためにこそ、国立・国会図書館でなければならず、立法府の立法活動のためにこそ図書館が必要なのだと強調し、行政権からの独立を強調し、従って支部図書館制度によって行政行為に対する主権者のコントロールを保証するのだと言っているのである。国会図のモットーは《The truth makes us free》であるが、真理が主権者の問題とされねばならないのである。主権者が真理か否かを判断するものであり、真理の判断基準が主権者から離れてはならないのである。この主権者は言うまでもなく国民であり、1945年8月15日以後現れた全く新しい主権者であり、明治天皇の政府ではなく国民主権の政府が出現したのである。

こまかい点にわたるようであるが、中野が国立図書館あるいは国立図書館網と書いているのも、疑問である。これはケアレス・ミスではあるまい。というのも中野は、国会図という表現と国会図への国立図書館の吸収という表現を正しく使っているからである。ということは、国立図書館が、ではなくして国会図がアメリカの調査網・宣伝網の中へ、く親近関係で組み込まれることになったとみているということであろう。国会図網そのものがアメリカの網の一部だと考えているということであろう。このく親近関係とは何を指すのだろうか。中野の文学的立場と政治的立場が分裂していたのであれば別だろうが、中野自身はそうは考えていないのである。とするとその関係とは、中野の立場との親近性ではないということなのだろう。く事実立ってくみてそうだというのであろう。く事実と解釈くのズレというのではあるまい。となると中野はこの表現を、不用意どころか意図的に使ったのだとせざるをえない。中野の文脈に即せば、国会図の構想に国立図書館がくみ込まれたこと自体が何らかのく親近関係においてのことなのだ。中野はく日本をアメリカのための反アジア軍事基地くとしようとする方向を日本が自から選択したことをく親近関係くとみるのだろう。が、中野は国立図書館網（国会図網と書いてないことに注意されたい）がまだく網くとしては出来ていなかったと書いているが、国立図書館構想においては、そもそもく網くの構想はないのである。一般に図書館網とはネット・ワークを意味するのであり、ネット・ワークという概念は、国会図副館長・中井正一（1900－1952）が使用してから一般化したといえるのである。そして図書館網という時に最も重要なのは国会図の支部図書館ネット・ワークであって、各々の図書館の間をネットするということは、そこに論理的必然性があるからであり、そうでなければ現実化しえないはずである¹¹⁾その論理的必然性を中野はどう考えていたのだろうか。このようなことからすると、中野の表現というよりは事実のとらえ方、事実立つ立ち方が十分だったのかどうか疑問なしとし

ない。

国会図の初代館長は金森徳次郎であるが、実質的な国会図の運営については中井正一副館長がリーダー・シップをとっていた。図書館理論の構築と国会図の機能の健全な発揮のための実践に、副館長・中井正一は全力を傾けたのである。中井は京都人民戦線事件（『世界文化』事件）で治安維持法違反により逮捕された経歴を持ち、当初は新しく創立される国会図の館長候補であったのだが、たかだか尾道市立図書館長としてわずかのキャリアしかない（素人）にすぎないではないかという反対も強くあったようであるが、その他にこの前歴のためにも（アカを国会に入れるなというビラが貼られたりもした）館長就任がなしえなかったとも言えるのである。この中井が国会図にいたことを中野が知らなかったというのであろうか。中井は羽仁五郎の推薦により館長候補となったのであるが、これには新村 出氏の助力もあり、参議院議長松平恒雄は新村 出との関係からのみではなく、羽仁委員長の国会図構想及び館長構想に対して信頼をよせていたのである。¹²⁾中野は館長人事については、「司書の死」で全くふれていない。が、くりかえせば中野個人の立場というより、中野の立つ立場からみても国会図の構想や館長構想については十分に知りうる場所にいたはずなのである。言うまでもなく国図法の成立についても、である。決してそれは〈解放〉と微妙に結びついていたかどうかに関してではなく、中野自身が戦後第1作「五勺の酒」で書いているように〈憲法でたくさんのことが教えられねばならぬのだ〉という立場からして、十分に知りえたはずなのである。ましてその文につづいて「（あれが議会に出た朝、それとも前の日だったか、あの下書きは日本人が書いたものだと言合軍総司令部が発表して新聞に出た。日本の憲法を日本人が書いたのだと外国人からわざわざことわって発表してもらわねばならぬほどなんと恥さらしの自国政府を日本国民が黙認していることだろう。）そしてそれを、なぜ共産主義者がまず感じて、そして国民に、訴えぬだろう。」と書いておいたのだが、カッコでくくった部分が「占領勢力」によって削除されてしまったために、なぜ訴えぬのかと「問われた共産主義者の国民への訴えそのものに」まで、「この『実力』（占領軍勢力のこと——引用者）が」、「輪をかけてかぶさって」行ってしまったのだと書いているのである。たしかにそのような〈実力〉による「検閲の暴力は、1945年から46年にはいって、非道さを奔騰させていった」のだらうし、「こういう検閲状態が、……あの時期の日本文学に陰に陽に強くひびいていたことを事実として疑わない」（以上、『新版全集(3)』（著者うしろ書））というのはまちがいでないだろう。しかし、では国民そのもののレヴェルでの動向をどう見るのか。そしてそれに対して、どのように対応したらよいのか。例えば、国民が〈恥さらしの自国政府〉に対してどのようにしたらよいかと苦悩している時、その国民に対していかに応じてゆくのかを考えねばなるまい。このことを正面に据えてみなければ〈検閲〉が何であったのかは、〈日本文学〉にとってさえアイマイになるのではないのか。〈検閲〉が中野などの立場を含むすべての立場を沈滞させたというのだろうか。あるいは、どこかの部分をのみ利したという結果になったというのだろうか。仮りにそうであるとしても、〈憲法でたくさんのことが教えられねばならぬ〉、あるいは学ばれねばならぬのではないか。その主体は国民ではないのか。いわば、〈それにも拘らず〉訴えるべきは国民であるはずである。そこにのみ、だから子供達にのみ希望があるとしたのは、まさしく国会図そのもののなのである。

その意味で最後にふれなければならないのは、クラブとブラウンについての記述である。クラブとブラウンが日本の図書館を私服でこっそり内偵した〉と書くのだから、何かの事実にもとづいてのことなのであろう。しかし「日本側との正式の初会合において、ブラウンはバーナード・ショウの『合意のためには意見の相違がなければならない』との言葉を引用して、両使節とも日本側の意見の相違を歓迎する旨表明されたが、これは両使節の共通した態度であって、いやしくも自分の意見をおしつける

ということは一度もなく、謙虚でもって、滞日期間を過ごしたことは、日本側関係者の一致した感想である。創立20周年で来日（1968年）したクラブの演説をもってしても説明できる（p. 42）」という証言もある。クラブとブラウンが図書館使節団として来日するのは、そもそも衆・参両院議長の要請によるのであって、私服でこっそり内偵する必要はなかったのである。1947年12月14日に来日した直後の16日、衆・参両議院の合同図書館運営委員会の席上、クラブは「日本国民が国会図を設立することが出来たら、日本国民のみならず、アメリカ及び他の国々も種々恩恵を蒙ることができる（p. 31）」ことを強調し、ブラウンも「長い将来からみて、貴方々は日本の発展に非常に大きな影響を与える機関を創っているのだ。われわれはそれが国民全体に奉仕するよう求めている」のであるとし、それは「議員に事実の情報を先づ提供すべきである」と語った。また「アメリカで経験した誤りを避けることに意を用いてもらいたい（p. 32）」¹³⁾とも語っていたのである。両使節は〈准将待遇〉をうけることになっていたが、それは派遣を求められたのが連合軍最高司令官マッカーサーであったから、〈准将待遇〉として派遣したのである。使節は軍人ではないので、制服をぬぎすててこっそり行動する必要はいかなる場合にもないのである。中野が何の根拠もなく書くとは思えないのではあるが、クラブとブラウンに関する記述は残念ながら当を得てはいないのではないかと。中野はクラブとブラウンの発言・行動のすべてを見て、どうしても〈アメリカの反アジア軍事基地構想〉の一環だと見ざるをえなかったのだろうか。くりかえせば、中野の国会での討論・演説は「かつてのお殿様で共産党嫌いの初代の松平参院議長でさえ、中野さんの演説だけは聴くのを楽しみにしていたということを聞かされたことがあります。それほど魅力があったのです」¹⁴⁾といわれるほどのものであったというのであるから、決して国会内で国図法や国会図について知りえくはなかったはずなのである。中野には秘書団がついていて、〈文字通り身を粉にして働いていた〉はずでもある。〈国会演説集〉でみる限り、国図法関係での演説はないのであるが、これは議員になって日が浅かったためであろう。ちなみに、クラブとブラウンの来日中の、1947年暮から1948年2月（国図法成立）にかけての中野の国会演説はないのである¹⁵⁾中野は国図法が通過した2月4日の本会議での羽仁委員長報告を聞かなかったのだろうか。

＜お わ り に＞

中野の「司書の死」における見解は、「中野が兼ねてからある問題なり事柄を取上げるとき、事実との照応を重視し、それによって一層論証を確かにするという書き方」¹⁶⁾をするのであるが故にというか、あるいはそれにも拘らずというか、相当問題を含むのではないだろうか。この作品を「同級の高木が『本食い虫』として自らも利用した『いい図書館』の司書として、虫けらのように命を落させられたことへの、作者の悲しみと憤りは深い」¹⁷⁾とみるのでは不十分だと思う。阿部知二は「司書の死」が『夜と日の暮れ』に収められた時の書評で、それは「『むらぎも』とはちがった性質のものであるが、しかしそれに劣らず重要な、力のこもったもので、戦後の文学の主な収穫の一つというべきだ」¹⁸⁾と書いていた。中野の見解そのものの意味を考えるという点では、このような文学作品としての位置づけがあることは貴重なものであろう。つまり、中野の見解をまともに取り上げる必要があるのである。文学史的にもそうであろう。そうしてみても、国会図に関する見解は、やはり多くの疑問を有しているといわざるをえないのではないかと。

中野が国会図の問題を作品に取り上げたこと、そして当時の中野の立場からすればそのように解釈で

きたのだということ、少くとも中野はそう感じたのだということに疑問があるというのではないのである。事実、そうであったのかどうかについては疑問であるというのである。中野は、1956年の発言ではあるが、こう言っている。「いま、残念に思うというか、ダメだったと思うのは、……連合軍なりGHQがやって来た、それがどういう仕組で、日本にたいするどういう権能を持っているか、占領軍と日本政府との関係、日本政府と日本国民との関係、この三者の図解的研究を俺なら俺が一つもしなかったということだ。対抗するならする、屈伏するならする、どんなふうにしたら一番正しいか、ということの研究しなかったことだ。¹⁹⁾」また、1976年になってからこう書いている。「3年議員に当選して西も東もわからぬ仕事にたずさわったりしたが、そのあいだに少しずつわかってきたことは、自分たちの過去が弱点に充ちたものだったらしいということだった。ひとことでそれをいえば実際上の私の無知ということだったろう。……歴史的無知といってもいい。しかし歴史は明らかにされていなかったのだから、この無知は私たち自身わが手でしらべなかったという事実だったろう。」(『新版全集(7)』〈著者うしろ書〉)。

国会図の構想は国図法に十分に示されているが、羽仁委員長の言う如く、人民主権は無知のうえには成立しないことの確認、無知があらゆる悲惨の原因であったし、結果的事実であるし、今後もそうあるだろうから、その無知の克服とそこからの脱却を図ること、真理のみが自からを自由にするという確信に基づくこと、に支えられているのである。中野の苦悩を示す発言や文章からすると、中野には基本的に国図法及び国会図の論理と共通するものがあったように思われるのである。何らかの理由があって、当時の中野にとって自からの眼前に生じていた現象・事態は、自己の根底での確信との乖離が大きいとみえたのであろう。しかしながら、そこに矛盾が否定しようもなく存在していることは認めざるをえないのではあるまいか。

注

- 1) この再度の編集長就任については、中野自身の〈説明〉がある。『新版・中野重治全集(7)』筑摩書房、1979、〈著者うしろ書〉を参照されたい。尚、以下『新版全集』と略記。
- 2) 中野は3年間に在学中で卒業しているが、当時は、「東大文学部はたしか単位を3年間に最低二十二か三ぐらいとれば卒業ができることになっていた」という。枝 法「古いさまたまの思い出をこめて」・『旧版中野重治全集(12)』月報14(1962年8月)、筑摩書房、1962。尚、以下『旧版全集』と略記。
- 3) 松下 裕「国会議員としての中野重治」・中野重治研究会編『中野重治と私たち―「中野重治研究と講演の会」記録集―』武蔵野書房、1989、p. 68。
- 4) このことについては、立花雄一『評伝横山源之助』創樹社、1979、を参照されたい。
- 5) 『国立国会図書館三十年史』1979年、p. 55。尚、拙稿「国立国会図書館法前文について」・『茨城大学教育学部教育研究所紀要』22号、1990、を参照されたい。
- 6) 羽仁五郎の委員長報告(1948年2月4日参議院本会議)などを含む諸論は『図書館の論理』(日外アソシエーツ、1981)に収められており、酒井氏などの論考は『国立国会図書館支部図書館外史』支部図書館館友会、1970、にまとめられている。尚、拙稿「国立国会図書館法前文について」前掲、も併せて参照されたい。
- 7) 平川千宏「国立国会図書館に関する新聞記事索引(1946-1976)」・『図書館研究シリーズ』18、1977、及び平川千宏「国立国会図書館に関する雑誌記事索引(1946-1976)」・『図書館研究シリーズ』19、1978、を参照されたい。また、『国立国会図書館三十年史(資料篇)』1980、も参照されたい。

- 8) 中野は、運輸及び交通委員、のちに労働委員、文部委員会の常任委員、在外同胞引揚問題に関する特別委員であり、そのほか法務委員会、大蔵委員会、地方行政委員会、懲罰委員会その他にも委員外委員として、あるいは委員のかわりに出席してしばしば発言したという。注3) の文献を参照されたい。
- 9) さらに、春山明哲「歴史のなかの調査局 — ウィリアムズを手がかりとして — 」・『図書館研究シリーズ』24, 1984, 末続義治「マッカーシーとその立法参考調査図書館 — 我が国における議会図書館の原像」・『図書館界』Vol. 42-1, 1990. 5., を参照されたい。
- 10) 酒井 悌「国立国会図書館法成立の過程」・『国立国会図書館支部図書館外史』所収, 同上, を参照されたい。
- 11) 中井 浩編『中井正一・論理とその実践 — 組織論から図書館像へ — 』てんびん社, 1970, を参照されたい。また、『中井正一全集(4)』美術出版社, 1981, も併せて参照されたい。
- 12) 拙稿「国立国会図書館・中井副館長就任までの経緯 — 特に新村 猛氏の証言を中心として — 」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』31号, 1982. 3., を参照されたい。
- 13) 酒井 悌・鈴木幸久「ヴァーナー・W・クラップと国立国会図書館」『図書館研究シリーズ』20号, 1978. 11.
- 14) 木村禧八郎「ほんものの人間としての中野重治さん」『旧版全集(16)』月報11(1962. 3.) .
- 15) 参考までに記しておけば中野は、1947年には参院本会議で4回、1948年には参院本会議委員会で計9回演説をしているのである。
- 16) 佐多稲子「中野さんの全集について」『新版全集(27)』月報27(1979. 6.) .
- 17) 『石川近代文学全集(8)中野重治』能登印刷・出版部, 1989, 〈作品解説〉. p. 424.
- 18) 平野 謙編『中野重治研究』(『旧版中野重治全集』別巻), 筑摩書房, 1960, p. 283.
- 19) 中島健蔵・中野重治編『戦後十年 日本文学の歩み』青木書店, 1956, p. 25.